様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２５４５

研究課題名（和文）「見ること」を中心とする、ピンチョン小説における認識論の残余についての研究

研究課題名（英文）Residues of Epistemology, or Seeing in Pynchon's Novels

研究代表者
石割　隆喜（ISHIWARI, Takayoshi）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：９０３１４４３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　表象の場としての意識と映画の類似性に注目すれば、スクリーンを介した『重力の虹』の〈現実〉表象はモダニズム小説の印象を介した現実表象の発展形と見なせる。またバザンのリアリズム映画論に依拠するなら、真実を照らす光に信を置くドキュメンタリー映画製作者を主人公とし、彼女の「真の顔」を暴こうとする『ヴァインランド』は、自らが内容において語る「映画的リアリズム」を形式的にも実践した小説であると言える。2作における映画の違い（パラノイア的投影＝映写とドキュメンタリー・リアリズム）が両作における「現実を見ること」の違いとなっている。重要な点は、どちらにも知への指向性が見て取れるという認識論の残存である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的な意義は、存在論的とされるピンチョンの小説に認識論（現実表象、ミメーシス、リアリズム、小説、「見ること」）の残余を読み取ろうとする点である。映画、心の哲学、認知科学、科学と宗教といった他領域にまたがる本研究により、ピンチョンの「ポストモダン」な小説に従来の認識論的「小説」との連続性が見てとれることが明らかとなるならば、ピンチョン研究のみならず「小説」という形式に対する一般的な受け止め方にも一石を投じることにつながると期待される。

研究成果の概要（英文）：The fact that both consciousness and the cinema represent makes it possible to regard Gravity’s Rainbow’s representation of “Reality” mediated by the screen as a postmodernist variation on the modernist indirect representation of reality mediated by impressions. Meanwhile, Vineland, seeking to show the “real face” of its female protagonist who is a documentary filmmaker, is formally founded on aesthetic principles reminiscent of Andre Bazin’s cinematic realism, which is echoed in her belief in revealing light. The difference in the types of cinema the two novels make use of (paranoid projection and documentary realism) reflects the difference in how they see reality. Despite this difference, they have a characteristic in common: they both aim to know, showing that there still remain epistemological tendencies in Pynchon’s postmodernism.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ピンチョン　認識論　重力の虹　ミメーシス　心的表象　映画　ヴァインランド　リアリズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

現代アメリカを代表する白人男性作家トマス・ピンチョン (Thomas Pynchon, 1937-) は、国内外を問わず、何よりもまずポストモダニズムの文脈のなかで研究されてきた。一般的に、ポストモダニズム小説の特徴は反リアリズムあるいは反ミメーシスだとされる。エーリッヒ・アウエルバッハ (Erich Auerbach) の『ミメーシス――ヨーロッパ文学における現実描写』(*Mimesis: The Representation of Reality in Western Literature*, 1946) の副題にあるように、ミメーシスとは現実の表象であるとするならば、現実の表象に無関心であるかのようなポストモダニズム小説は確かにリアリズム的ではない。このことは、ポストモダニズム小説が、「文学」そのものと戯れ、「文学」そのものに自己言及するかのように特に大衆的な文学ジャンル（探偵小説、SF、コミックス等）のパスティーシュを多用することや、言語構築物としての自らの存在に過剰なまでに意識的なメタフィクションという形をしばしば取ることに顕著に表れている。

と同時に、ポストモダニズム小説の反リアリズムは表象の対象となる現実に起因するとの指摘もなされてきた。ライオネル・トリリング (Lionel Trilling) の『文学と精神分析』(*The Liberal Imagination*, 1950) やアーヴィング・ハウ (Irving Howe) の "Mass Society and Post-Modern Fiction" (1959) を源流と見なせるこのような批評の流れは、ジャン＝フランソワ・リオタール (Jean-François Lyotard) による資本主義の崇高性 ("The Sublime and the Avant-Garde," 1984) やフレドリック・ジェイムソン (Fredric Jameson) による後期資本主義社会における認知地図の必要性 (*Postmodernism: Or, the Cultural Logic of Late Capitalism*, 1992) についての議論に結実し、以降の研究に大きな影響を与えてきた。すなわち、社会全体に輪郭と形を与えてきた階級や植民地の存在感が少なくとも表面的には薄れ、社会がグローバルで均質な高度大衆消費社会としていわば「箍（たが）」が外れた姿を呈したとき、ポスト近代社会の現実は従来の小説的手法では十分に表象できなくなったのである。現実表象（ミメーシス）の不可能性（アウエルバッハの副題をもじれば "the unrepresentability of reality"）を体現するポストモダニズム小説の出現は、こうしてその理由を近代からポスト近代への社会的変化という外的要因にも求められうる。同時代の現実ではなく過去の歴史に題材を求める「歴史記述的メタフィクション」と呼ばれるポストモダニズム小説 (Linda Hutcheon, *A Poetics of Postmodernism: History, Theory, Fiction*, 1988) が多いことは、このことの徴候として捉えることができる。

個別の作家研究としてのピンチョン研究も、このようなポストモダン研究全般の流れと切り離すことはできない。ピンチョン研究において、上述のミメーシスの不可能性という問題は、認識論から存在論への移行という形でより作品に沿って具体的に問題化されている。ブライアン・マクヘイル (Brian McHale) が *Postmodernist Fiction* (1987) で提唱し、*The Cambridge Companion to Thomas Pynchon* (2012) 所収の論考で成熟させたこの仮説は、モダニズム小説においては認識論が支配的であるのに対して、ポストモダニズム小説においては存在論が支配的であるというものである（類似の視点は、William V. Spanos, "The Detective and the Boundary: Some Notes on the Postmodern Literary Imagination" (1972) において実存主義哲学と関連付けられる形で提示されている）。すなわち、モダニズム小説は現実をどのように認識するか（ヴァージニア・ウルフのように意識に映じる印象としてか、それともマルセル・プルーストのように無意志的記憶を通じてか）についての小説であり、そこでは現実はいまだ存在し、認識の対象たりえている。対して、ポストモダニズム小説はそもそも現実が存在しているのか、存在しているとすればそれはどのような現実（あるいはどの現実）なのかを問う小説であるという仮説である。マクヘイルの仮説において、ポストモダニズム小説は「現実」とされるものの「リアリティ」をめぐる存在論的不安を内包している。これは、上述の現実表象の不可能性を哲学の側から説明した優れた指摘（ポスト近代の現実は認識できない、それは存在論的に不安定である）であると言えるが、彼は特にピンチョンの分析において、小説中に現れる幻覚と夢と他メディア（映画やテレビ）に注目し、ピンチョンの小説が現実の存在論的不安定性を問題化する典型的なポストモダニズム小説であると論じる。

以上のようなポストモダニズム研究ならびにピンチョン研究双方に貢献すべく、申請者は、科学研究費補助金若手研究（B）「「小説」論的観点からのピンチョン研究」（課題番号：22720101、2010-2012 年）において、まず、モダニズム小説とポストモダニズム小説の対比を主眼としていたマクヘイルの仮説を修正すべく、認識論的なモダニズム小説に対して存在論的とされるポストモダニズム小説を、「小説」形式との関係で捉え直すことができる点を明らかにしようと試みた。イアン・ワット (Ian Watt) の『小説の勃興』(*The Rise of the Novel*, 1957) によれば、18 世紀イギリスで「勃興」した小説形式は認識論的であり（ワットはデカルトやロックの近代哲学ならびに「法廷の陪審員」とのつながりを指摘している）、だとすれば、マクヘイルのモダニズム小説が同じく認識論的とされていることを考えれば、認識論と存在論はモダニズムとポストモダニズムではなく、小説（リアリズムからモダニズム）とポストモダニズム小説というより大きな対比関係（「小説の勃興」と「小説の死」）のなかで捉えられねばならない。このことを踏まえ、次にピンチョンの『競売ナンバー49 の叫び』と『重力の虹』を具体的に分析したところ、マクヘイルの仮説にもかかわらず、両作は存在論の優勢（ドミナンス）というよりは認識論の危機と呼ぶべき特徴を備えていることが見てとれた。すなわち、探偵小説のパスティーシュである『競売ナンバー49 の叫び』において、探偵役の主人公は物語の結末で事件の真相を見いだすことはできないものの別のものについての「真実」を最終的に認識し、また『重力の虹』は第二次世界大戦の真実を認識しようとして逆説的に妄想を投影しているのである。2 作において必ずしも存在

論的別世界が支配的に描かれているわけではなく、むしろ認識論的「見ること」の臨界が前景化されていることを示したこの研究の成果は、「小説の非人間化――ポストモダニズムとポストヒューマン」(『言葉のしんそう（深層・真相）――大庭幸男教授退職記念論文集』英宝社、pp. 137-147、2015）ならびに "Rainbow's Light: Or, 'Illuminations' in Thomas Pynchon's *Gravity's Rainbow*" (*The Japanese Journal of American Studies*、第 24 巻、pp. 185-201、2013) として発表した。

こうした研究を踏まえ、ピンチョン作品は確かに存在論的傾向を示してはいるがその方向性はいまだ決定的なものではなく、まだ十分に認識論的（ワットの「小説」的）要素を残している、ゆえにピンチョンにおける認識論の残余について研究する必要があるとの考えに至った。申請者はこのことをより鮮明に「見ること」の問題として発展させることができると考え、その成果を「探偵と電球――「見ること」の変態」(『現代作家ガイド 7　トマス・ピンチョン』（彩流社、pp. 148-167、2014）として発表した。そこでは、現実を光で照らすことにより対象の真の姿を目に見えるようにする認識論的タイプの「見ること」を「探偵」的、自ら発光して虚像やヴィジョンを投影（プロジェクト）ないし幻視する存在論的タイプの「見ること」を「電球」的と呼び、前者から後者（"eye" から「プロジェクター」）への「見ること」の様態の変化を『競売ナンバー 49 の叫び』から『重力の虹』への作風の変化のうちに跡付けることを試みた。しかしながら、『重力の虹』において「見ること」が存在論的な様態へと変化しているというこの指摘は作品の一面を捉えたものに過ぎず、前述のように同作において認識論的「見ること」は逆説的にではあれ前景化されている。ピンチョンにおいて認識論は消えることなく残存しているのである。

２．研究の目的

本研究は、以上述べた、「見ること」に着目してピンチョン作品と認識論とのいまだ不可分な関係を明らかにしようとする申請者の研究をさらに発展させようとするものである。すなわち、ピンチョンの作品全体を内容と形式の両面において貫くテーマが「見ること」であるという観点からピンチョン文学を捉え直そうとする研究の一環として、すでに研究の対象としているもののいまだ未着手の点が残る『重力の虹』と、本観点からは初めて扱うこととなる『ヴァインランド』(*Vineland*, 1990) と『メイスン＆ディクスン』(*Mason&Dixon*, 1997) を取り上げ、これら 3 作における認識論の残余の重要性を検証しようとするものである。

３．研究の方法

本研究の基本的な方法は、対象となるテクストの精緻な読解と、先行研究ならびに関連文献の精査である。まず『重力の虹』を研究対象として取り上げる。本作は映画を模した小説であるため、本作と映画との関係を考察することを出発点とする。映画との関連における『重力の虹』研究について本研究開始時点で判明していることは、映画を模した小説である本作が第二次世界大戦という現実の表象ではなく「表象の表象」と捉えられているということ（ただしポストモダニズム的存在論に引きつける形で）である。この点を踏まえ、意識の表象として同じく「表象の表象」と考えられるモダニズム小説との比較も行い、ピンチョンの現実表象とモダニズム小説の意識の表象との類似点ならびに相違点を探る。ここで関係してくるのは哲学における「心的表象」(mental representation) であるが、心の哲学ないしは認知科学に関係するこの概念が『重力の虹』読解に貢献する可能性を、心的表象の場としての意識と同じく表象の場としての映画スクリーンとの類似性に注目しつつ探る。こうして本作における映画が現実表象としてのミメーシスの流れの上に位置付けられる可能性を確認し、「現実を見る」小説としての本作の性格を明らかにする。

次に取り上げるのは『ヴァインランド』である。本作はドキュメンタリー映画作家を主人公としているため、『重力の虹』の場合と同様、まずは本作と映画との関係を考察することから始める。特に実践と理論の両面から映画におけるリアリズムに注目し、リアリズム的性格を付与された『ヴァインランド』の映画が本作をどのような『重力の虹』とは異なった「現実を見る」小説としているかを探る。

最後に『メイスン＆ディクスン』を取り上げる。本作は 18 世紀に金星の太陽面通過を科学的に観測しつつ天体の運行という自然現象の背後に神の存在を「見る」二人の科学者を主人公としているため、科学と宗教の関係に関する関連先行研究の精査から開始する。またピンチョンはエッセイ "Is It O. K. to Be a Luddite?" (1984) において科学技術を「ラダイト」的に批判しており、そこでの作者の反科学テクノロジー志向と『メイスン＆ディクスン』におけるいまだ宗教と不可分である科学（自然哲学）がどのような関係にあるのかを探る。

４．研究成果

映画を模した小説である『重力の虹』は、認識論的とされるモダニズム小説の現実表象（ミメーシス）の延長線上にある現実表象（第二次世界大戦の表象）を行っていると考えられる。なぜなら『重力の虹』におけるスクリーンを介した間接的な現実表象は、モダニズム小説における意識を介した間接的な現実表象と形式的には同じであり、そこでは意識がスクリーンへと置き換わっているにすぎないからである。この意識と映画の類似性は、心の哲学が唱える心的表象（志向性）という概念に注目することで明らかとなる。スクリーンを介した『重力の虹』の〈現実〉表象はモダニズム小説の意識に映じる印象を介した現実表象の発展形であり、スクリーンへの映写＝投影によってこそ真の〈現実〉を「見る」ことができるとするいまだ認識論的な姿勢に、

同作の「見ること」をめぐる小説としての特質が現れていると考えられる。以上のことを論文「映画的ミメーシス――*Gravity's Rainbow* における現実の表象」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 59 巻、pp. 201-219、2019）にまとめた。

認識論的「見ること」は、やはり映画をめぐる小説である次作『ヴァインランド』においても引き継がれている。主人公が属するドキュメンタリー映画グループは同時代のダイレクトシネマや Newsreel と方法論や思想を共有するが、光の「暴く」力を拠り所とする彼女らの映画的信念は何よりもアンドレ・バザンのリアリズム映画論と重なり合う。映画の本質を「現実を暴露」することと捉えたバザンのリアリズム論に依拠するなら、真実を照らす光に信を置くドキュメンタリー映画製作者を主人公とし、彼女の「本当の顔」を明らかにしようとする同作は、自らが内容において語る「映画的リアリズム」を形式の上でも実践した小説であると言える。こうして、『重力の虹』とは異なる仕方ながら、『ヴァインランド』は「現実を見る」小説となっている。この映画的リアリズムを自ら実践した小説と見なせる同作を『重力の虹』と比較する際に、映画の違い（前者のドキュメンタリー・リアリズムと後者のパラノイア的投影＝映写）に注目することが重要であり、この違いが両作における「見ること」の違いとなっているのである。以上をまとめた論文が「光は暴く――*Vineland* における映画的リアリズム」（『待兼山論叢　文化動態論篇』第 53 号、pp. 1-19、2019）である。

『メイスン＆ディクスン』については、研究には着手したものの、科学と宗教の関係に関する関連先行研究の精査にとどまった。したがって、「ラダイト」的とされる作者の科学観との関係を含めた本格的な研究は申請者の令和 2 年度からの新たな科学研究費研究課題（基盤研究（C）「ピンチョン文学における科学と人文学との接点について――「見ること」という観点から」課題番号：20K00415、2020-2022 年）において開始することとする。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 石割隆喜	４．巻 -
２．論文標題 光は暴く――Vineland における映画的リアリズム	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本英文学会第90回大会Proceedings	６．最初と最後の頁 23-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石割隆喜	４．巻 59
２．論文標題 映画的ミメーシス――Gravity's Rainbow における現実の表象	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 201-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.18910/72102	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石割隆喜	４．巻 -
２．論文標題 映画的ミメーシス――Gravity's Rainbow における現実の表象	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本英文学会第89回大会Proceedings（付 2016年度支部大会Proceedings）	６．最初と最後の頁 268-269
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石割隆喜	４．巻 53
２．論文標題 光は暴く――Vineland における映画的リアリズム	５．発行年 2019年
３．雑誌名 待兼山論叢　文化動態論篇	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 石割隆喜
２．発表標題 光は暴く――Vineland における映画的リアリズム
３．学会等名 日本英文学会第90回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考